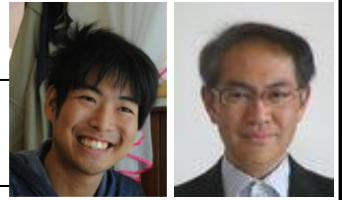


## 「Days-Before」の語りの可能性についての一考察

阪神・淡路大震災、新潟県中越地震、昭和南海地震の語りの比較分析

京都大学大学院 情報学研究科 博士後期課程 杉山高志

京都大学防災研究所 教授 矢守克也



### 1. 研究背景

災害の経験を後世に伝えるため、被災者による語り部活動や手記の出版などを通して、数多くの語り継ぎが行われている。例えば、被災直後の生々しい被害の様子を描写した恐怖の語りや、避難所で助け合ったという共助の語り、被災後に幾度の困難を乗り越えて現在の生活に至ったという回復の語り、災害時の行動に関する後悔の語り、災害に対する事前の備えをすべきという防災の語りなど多種多様な被災経験談が話されている。これらの語りは、災害による被害を抑制するための防災教育コンテンツとしても大きな役割を果たしている。

しかし、上記の語りの中で見過ごされてしまっている語りがあるのではないかと。これまで例示した被災経験談の内容は多岐にわたっているものの、これらはすべて、災害という現実の出来事を前提にした語りである。現に、関東大震災、阪神・淡路大震災における手記集の中では、災害直後以降の被災の様子に関する語りが大半を占めていると指摘されている<sup>1)2)</sup>。一方で、災害が起こる前には、被災者は災害を特段に意識することのない、穏やかな日常の生活を営んでいたはずである。にもかかわらず、被災者の語りのほとんどが、災害という現実の出来事を前提とした内容であることは、被災者が語りえる経験談に「死角(dead angle)」が存在することを示唆している。

多くの被災経験談の陰で見過ごされてしまっている語り、つまり、「死角」となっている語りとは、災害という現実世界の出来事を志向しない語りであり、被災という事実をあえて前提にしない語りなのではないだろうか。換言すると、災害を契機として被災者の言葉を聞くのではなく、被災前の生活にまで遡って

被災者の言葉を聞く姿勢に欠けているのではないかと。矢守らは、このような問題意識をもとに、被災当日の「その日(The Day)」よりも前の日常生活の様子について言及した語り、「Days - Before」の語りを聞き取る調査を行っている<sup>3)</sup>。

とはいえ、被災前の生活について記述された語りは皆無というわけではない。例えば、内閣府が行っている『一日前プロジェクト』という活動がある<sup>4)</sup>。このプロジェクトでは、「一日前にもどれるとすれば、どのような防災・減災をしますか」という質問を被災者に投げかけ、発災一日前の生活の様子について様々な語りが収集されている。ただし、多くの住民は、被災前には、災害に対する備えを日常生活の中で、第一義的な問題として大きな関心を払っていなかったであろう。それにも関わらず、『一日前プロジェクト』の中で抽出される被災前の生活の語りは、物理的な意味で被災前の経験談を求めているものの、防災や減災のために機能的に役立てようとそれらの語りを誘導してしまっているのである。先に指摘した被災経験談の「死角」とは、災害をあえて志向しない語りのことであり、『一日前プロジェクト』は被災前の生活について抽出した語りではあるが、災害に対する備えについて語っている点において、「Days - Before」の語り、すなわち災害をあえて前提としない語りとはいえない。このように、震災を夢にも思わなかった穏やかな日々が被災前にあったはずなのににもかかわらず、震災の語りの中で被災前の生活、すなわち「Days - Before」の視点から経験談が語られることは少ないという現状である。

「Days - Before」の語りは、被災者の語りを聞く側の「死角」を単に補填することのみならず、被災者

自身にとっても重要な意味を持つと考えられる。災害を前提とした数多くの被災経験談では、現実に目の当たりにした災害現象について中心的に語られる。しかし、被災者の生活とは、被災前から継続しているものである。被災経験を殊更に強調した語りは、震災の前後で被災者の生活の連続性を断絶させかねない。災害を前提にした語りのみを繰り返すことによって、被災前の生活について振り返ることを過度に抑制すれば、それらの語りは被災前にあった被災者のかけがえない日常の回復や復帰を妨げかねない。「Days - Before」の語りによって、被災前の生活に被災者が目を向けることは、被災者が被災の衝撃の克服とそこからの回復に向けて、新たな発見と糸口を提供すると考えられる。

以上のことから、本研究では、「Days - Before」の語りがいかなる可能性を内包するかについて探究することを目的に、「Days - Before」の視座に基づき、被災者の経験談に関する考察を試みた。

## 2. 研究方法

本研究では調査によって得られた「Days - Before」の語りの内容を複数の被災地で比較検討し、「Days - Before」の語りの可能性について分析を行った。

今回は、1995年に発生した阪神・淡路大震災の被災地・兵庫県神戸市にて親族を亡くし自らも被災した住民2名（男性1名、女性1名）、2004年に発生した新潟県中越地震の被災地・新潟県長岡市にて被災した住民9名（男性7名、女性2名）、1946年に発生した昭和南海地震の被災地・高知県高岡郡四万十町にて被災した住民3名（女性3名）に対する半構造的なインタビュー調査を2013年11月から2014年12月に実施した（表1を参照）。

具体的な質問項目として、「被災前の生活の様子を教えてください」「災害が発生しなかった未来を想像して、その生活を教えてください」と尋ね、インタビュー調査前に了承を取った上で、ICレコーダーでその内容を録音した。

表1 調査対象者の一覧

	記録日時	記録場所	年代	性別
A	2013/11/21	兵庫県神戸市	70代	男性
B	2014/1/18	兵庫県神戸市	60代	女性
C	2014/3/3	新潟県長岡市	70代	女性
D	2014/3/3	新潟県長岡市	70代	男性
E	2014/3/3	新潟県長岡市	80代	男性
F	2014/3/4	新潟県長岡市	70代	男性
G	2014/3/4	新潟県長岡市	60代	男性
H	2014/3/5	新潟県長岡市	90代	男性
I	2014/3/5	新潟県長岡市	70代	男性
J	2014/3/5	新潟県長岡市	50代	男性
K	2014/3/6	新潟県長岡市	60代	女性
L	2014/12/16	高知県四万十町	80代	女性
M	2014/12/17	高知県四万十町	70代	女性
N	2014/12/17	高知県四万十町	80代	女性

## 3. 研究結果

本研究の調査結果を、被災地ごとに端的にまとめる。以下、掲載された語りの調査対象を明示するため表1に併記しているアルファベット記号を、その調査対象の仮名として表記する。

なお、本研究の結果をより分かりやすく論じるために、各事例で得られた結果のフレームワークをはじめに確認しておく。各事例における語りの相互関係を位置づけるためのフレームワークを提示することは、それぞれの特徴を理解し比較する助けになるだろう。

### (1) 各事例を位置づけるためのフレームワーク

「Days - Before」の語りの特色は、災害を切り口にした被災者の語りを聞き取るのではなく、被災前の生活、「Days - Before」の様子を糸口にインタビューを行い、「震災が起こらなかったならばありえた想像世界」、つまり災害をあえて契機としない被災者の生活の描写を聞き取る点にある。「Days - Before」の語りは、通常の被災経験談とは異なり、震災によって物理的に破壊された情景描写を調査するのではなく、震災が起こらなかった被災前の生活の様子、震災が起こ

表 2 本調査における各事例の語りの特徴

	災害を人生の重要なエポックと位置づけている被災者	災害を人生の重要なエポックとは位置づけていない被災者
劇的な喪失を伴った被災者	本調査の阪神・淡路大震災の被災者 (A~B)	
それ以外の被災者	本調査の新潟県中越地震の被災者 (C~K)	本調査の昭和南海地震の被災者 (L~N)

らなければありえた生活の様子といった「震災が起らなかったならばありえた想像世界」を聞き取る手法なのである。

「震災が起らなかったならばありえた想像世界」を導出するきっかけとなる語り口である「Days - Before」の語りは、各事例においてその現れ方が異なると本研究の調査によって分かった(表 2 を参照)。その最も大きな違いは、「①劇的な喪失を伴った被災者」と「②それ以外の被災者」との間の差異である。本研究では、まず、阪神・淡路大震災によって親族を亡くした遺族に聞き取り調査を行った。一方で、新潟県中越地震や昭和南海地震の事例においては、家屋の損壊といった被害を受けた住民に聞き取り調査を行った。これらの住民は、上述の遺族と比較すると「劇的な喪失」を伴ったとは言えない。つまり、本研究における阪神・淡路大震災の被災者は「①劇的な喪失を伴った被災者」であり、本研究における新潟県中越地震や昭和南海地震の被災者は「②それ以外の被災者」と位置づけることができる。これらの被災者の性質の違いにより、「震災が起らなかったならばありえた想像世界」の現れ方が大きく異なった。

具体的には、阪神・淡路大震災の被災者(「①劇的な喪失を伴った被災者」)は、「震災が起らなかったならばありえた想像世界」を語ることを通して、震災によって喪失した親族の多様な人格に気づき、それを

媒介にして、現在の「リアルな世界」に対する新たな意味を発見するという語り口を示した。本研究で対象とした阪神・淡路大震災の被災者は、震災によって息子や娘を亡くした遺族である。そして、通常の彼らの被災経験談は、震災直後の惨憺たる情景を描写したものが多く、しかし、「Days - Before」の語りでは、被害の情景描写ではなく、亡くした息子や娘を語りの主題として話した。そして、彼らとの被災前の思い出や震災がなければありえた彼らの将来についての語りを通し、震災で亡くした親族の多様な人格に気づき、彼らと亡くなった家族とが共に「今」を生きていくための新たな糸口を導き出した。

それに対し、新潟県中越地震の被災者(「②それ以外の被災者」)は、「震災が起らなかったならばありえた想像世界」を語ることによって、過疎化が深刻な中山間地域の集落に、震災後、外部からボランティアが入り日常生活に新たな価値を見出し、現在の生活の「ありがたさ」を再評価するという語り口を示した。災害とその後の復興プロセスがなければ、より厳しい形での「限界集落化」というさらに苦しい事態が十分にありえたにもかかわらず、そうした歴史的発展の経路は当事者からも聞き手からも消失しがちだ。しかし、「Days - Before」の語りは「震災が起らなかったならばありえた想像世界」に関する語りを通して、その潜在化していた経路を顕在化させた。その結果として、被災者は、現在の「リアルな世界」の文字通りの「ありがたさ(有り難さ)」「そのようにある可能性は決して高くはなかったこと」に気づき、それが現在の生活の再評価にもつながると語り口を得たのである。

また、昭和南海地震の被災者(「②それ以外の被災者」)からは、「震災が起らなかったならばありえた想像世界」によって、「震災が起らなくても、あの時の現実世界やこの今の現実世界は、このようにありえたこと」、つまり、災害だけが語り手の人生のエポックではないこと示す語り口を得た。確かに、昭和南海地震とは1946年に発生した歴史上の大災害である。

そのため、その出来事は人々の生活や人生を大きく画するエポックであると社会の側は無条件でとらえがちで、それに適合的な経験談（だけ）を引き出してしまいがちでもある。しかし、「Days・Before」のアプローチが、「震災が起こらなかつたならばありえた想像世界」を想起させる語り口を被災者にもたらすことで、被災者は南海地震を、人生を形づくる「多くの出来事の一つ」として見なす視点を示したのである。それは、例えば、「震災が起こらなくても、食糧事情が厳しいあの時の事情は大きく変わらなかつただろう」、「震災が起こっても起こらなくても、いずれ今のようにな世になっていたであろう」といった語りである。

以上をまとめよう。「Days・Before」の語りが導く「震災が起こらなかつたならばありえた想像世界」を媒介とした時、通常、「震災が起こつたから X だけど、震災が起こらなければ Y だったかもしれない」というロジックで語り展開されることが多い。本研究で検討している事例で言えば、阪神・淡路大震災の被災者と新潟県中越地震の被災者は、この点で共通している。ただし、両者の違いは、前者では、当事者に対して Y が X よりも無条件で望ましいものとして現れているのに対して、後者では必ずしもそうでなく、場合によっては X の方が Y よりも望ましいものとして現れる可能性があることを示唆している。

他方で、昭和南海地震の被災者は、上述の定型的パターンから外れる場合もあることを示している。すなわち「震災が起こつたから X だけど、震災が起こらなくても（ほぼ）X である」という形式で、「震災が起こらなかつたならばありえた想像世界」が位置づけられていると分類できる。

以上のように、語り手の被災の度合いの差異、そして災害の歴史的・社会的な背景の違いにより、「Days・Before」という同様のアプローチだったとしても、多様なパターンの語りを導くことが分かる。以下、被災者の具体的な語りを紹介し、各事例の特徴をより詳しく説明する。

## （2）阪神・淡路大震災の被災地での聞き取り

兵庫県神戸市で行った 2 名の住民への聞き取り調査では、「震災によって親族が亡くなった現実世界」だけではなく、「震災が起こらずに親族が生き続ける想像世界」という複数の「語りの世界像」が示され、これらの「語りの世界像」を通じた新たな語りを構築するという結果を得た<sup>3)</sup>。

今回の調査で聞き取りを行った 2 名は、いずれも阪神・淡路大震災によって親族を亡くした住民であり、亡くなった親族に対する悔恨や後悔の念を、彼らの普段の被災経験談の中でしばしば表現していた。これらの苦悶の念とは、上記の「震災によって親族が亡くなった現実世界」において生じる語りである。災害を前提とした従来の被災経験談において、語り手の苦しみを助長したのは、経験談の内容が「現実の世界像」にのみ拘泥していたことが一因と考える。

一方で、本研究では、被災前の生活に関する聞き取り調査から、「震災が起こらなかつたならばありえた想像世界」が続けて導出された。こうした語りの新たな世界像が、「現実の世界像」のみでは見出せなかつた新たな発見を促し、現在の世界に繋がる新たな語りを導き出していた。

具体的には、B さんは通常の被災経験談では、B さんの娘が震災によって亡くなった生々しい情景を克明に話し、震災がもたらした被害の大きさについて表現していた。一方で、今回の聞き取り調査では、そのような被害の情景描写ではなく、B さんの娘についての多様な性格が語られた。例えば「震災がずっと続いていたならば、家で私や家族に見せる、甘えん坊な性格の女性として成長していったらだろう」という娘の一面が B さんの印象に残っていたものの、震災後、娘の同級生から「実は娘はクラスの中でリーダーシップを発揮し、同級生から一目おかれ感謝される存在だった」ことを言われ驚いたエピソードなどである。つまり、被災前の娘との生活の様子を糸口にした語りを通じて、「いろんな娘がいたんだということをもみんなに知ってもらい、忘れないでいてもらえるように」との思いが浮上してきたと考えられる。このように、震災

をあえて契機としない語りによって、複数の「語りの世界像」を導き、亡くした親族の多様な人格に気づくことを通し、現在の生活に対する新たな意味を発見するという姿勢が B さんには見られた。

また、A さんにおいても、息子を震災で亡くしてしまい、息子の未来が失われた悲しみを主題にする通常の語りとは異なる語り口が、「Days・Before」の語りによって引き出されている。例えば、「大学進学後に息子の下宿先で、息子と一緒にお酒を酌み交わした」といった被災前の息子との多彩な思い出、「震災がなければ、息子は海外留学をして大学の教員になったに違いない」という震災がなければ成し遂げたであろう息子の将来の夢、そして「震災後、息子の同級生が家に来て“Aさんの息子の意思を継ぎました”と言ってくれた」という被災前の息子を回顧する被災後の出来事などである。これらの語りは、息子の様々な一面や思い出を引き出し、「私も息子の分まで頑張って生きていこうと思った」という A さんの現在への前向きな思いへとつながっている。

阪神・淡路大震災の被災者 2 名に対する調査では、「Days・Before」の語り引き出す「震災が起こらなかつたならばありえた想像世界」をきっかけにして、従来の被災経験談では導き出さない複数の「語りの世界像」を被災者が導き出すと明らかになった。これらの複数の「語りの世界像」は、震災に対する苦悶や後悔の念を増幅させるのではなく、むしろ震災で亡くした親族の多様な性格や思い出を被災者に想起させ、彼らと亡くなった家族とが共に生きていくための新たな基盤となることが示唆された。

### （3）新潟県中越地震の被災地での聞き取り

新潟県長岡市で行った 9 名の住民への聞き取り調査では、震災後に外部支援者と共に集落の復興に取り組んだが、被災前には限界集落として滅び行くしかなかった村落のことを考えると、現在の生活復興は殊に喜ばしいという語りを得た。

今回調査対象とした新潟県中越地震で被災した住民は、先述の阪神・淡路大震災で被災した住民とは異

なり、親族を亡くすといった震災による大きな喪失は被っておらず、家屋の損壊といった被害を受けている。このため、家族・親族のことよりも、自らが住む集落に関することを多く語った。調査した住民の居住地は、長岡市の中山間地域で日本有数の豪雪地帯であり、被災前から深刻な過疎化が続き、限界集落としてその存亡が危ぶまれる地域だった。それ故に、被災前の生活は、より悲観的に表現される一方で、被災後の生活については、外部支援者が震災復興のために集落に入り、住民と外部支援者との間に新たな交流が生まれ住民が集落の魅力を見出したなど、前向きな内容が目立った。

具体的には、D さんは「地震の後に、外部から人が来てもらうことによって元気をもらっている」と震災後に復興ボランティアと共に集落を盛り上げてきた記憶を語る一方で、「地震の前から長年耕してきた田んぼも、いつかは管理できなくなり将来性はないと思っていた」と話した。そして、D さんは「それでも、地震の後に外部の人にとって集落での生活は新鮮で魅力的だと教えられ、それから集落の良さが分かるようになった」と現在の生活について話した。

また、G さんは「この集落では雪かきができないと暮らしていけない。畑だけ集落に置いて、家は集落とは違うところに住んでいる人もいた。年で亡くなる人も多く、八つ墓村みたいだった」と被災前の生活の様子を語る一方で、「落ち込む間もなく生活を立て直してきた。地震の後、大学の先生に、この集落では運動会や寄り合いにほとんどの住民が参加していることを調査で明らかにしてもらい、集落のつながりを保つためにこうした催しをこれからも続けていこうと思うようになった」と震災後について話した。

これらの語りから分かるように、災害をあえて契機としない被災前の生活について聞き取る調査は、被災前には滅び行く集落が持っていた地域固有の事情を浮き彫りにし、震災後に外部支援者と共に見出した集落に対する住民の希望や喜びの念の大きさを再発見するという語り口を導いた。

#### (4) 昭和南海地震の被災地での聞き取り

高知県高岡郡四万十町で行った3名の住民への聞き取り調査では、昭和南海地震によって津波や火事といった被災はあったものの、仮に昭和南海地震が無くとも、第二次世界大戦直後の貧窮した生活の最中で、進駐軍の進出や猛烈な台風の襲来といった様々な出来事が起こる苦しい毎日だったことには変わりはない、つまり、昭和南海地震はその当時山積していた生活苦の一つとして現在の自分自身を育てたという内容の語りを得た。

今回調査を行った昭和南海地震で被災した住民は、上記の新潟県中越地震で被災した住民と同様に、震災によって親族を亡くすといった喪失は被っておらず、当時の居住地の一部が津波で浸水し火事が発生したといった被害を受けている。昭和南海地震は1946年に発生し、戦後の劣悪な食糧事情の中で起きた災害であり、そのため、被災前の生活は、芋ひとつ餅玉ひとつの甘さで糊口して、毎日を必死に生き抜いた生活だった(Lさん)という。当時は昭和南海地震の災害の脅威のみならず、大戦により荒廃した国内産業により食糧事情は劣悪であり、脆弱なインフラの中でキャサリン台風を始めとする猛烈な豪雨災害の被害に遭ったことから津波災害に限定されることなく、日常生活の不安は山積していた。このような当時の地域の事情や時代の背景は、「災害が起こらなかつたならばありえた想像世界」の描写にも色濃く反映されることになる。

例えば、Lさんは「試験がちょうど終わった頃で、熱を出した下級生を寮で看病していた時に地震に遭った。運動場で火を焚いてお芋と水煮を食べ、“食べられればよい”という状態だった」と当時の様子を振り返っている。しかしその一方で、「地震がなくても自立しないといけない生活はきっと変わらなかったと思う。地震だけではなく、お金があっても物が買えず女学校の寮生と食べ物を分け合ったような当時の時代が私の生き方の幅を広げたと思う」とも語っている。

また、Nさんは「地震の前は、家の外で大根を干すため大根を細かく切る家の手伝いや、のりや塩を売る生活をしていた。地震によって、近くの集落は船が流され大変な状態だった」と話す。他方で、「地震の後も、被災前と変わらず浜の岩から塩づくりをしていて、その塩を背負って山の上の集落まで何時間も歩いて運んでいた。毎日を暮らしていくためにはしなくてはならないことで、地震が無くても続けていた」と話した。

このように、昭和南海地震の被災者3名に対する調査では、「Days - Before」の語りは、昭和南海地震を取り巻く時代背景を克明に浮かび上がらせた。ここでは、昭和南海地震だけが人びとの人生や生活を截然と画するエポックになっているのではなく、多くの出来事と一体となっていること、言い換えれば、地震の前後が歴然と断絶しているのではなく、一連の地続きの出来事として把握されていることが示唆された。

#### 4. 考察

前項の調査結果を、以下に大きく3つの観点に分けて考察する。

##### (1) 聞かれることのなかった語り

本研究では、3つの被災地を対象に聞き取り調査を行った。それぞれの被災地で収集した語りの内容には、いくつかの違いはあったものの、次の重要な共通点が見られた。それは、いずれの被災地においても、「Days - Before」の視座、つまり、災害という事実を前提としない視座を用いた語りの聞き取り調査は、本研究が初めてだ、と大半の住民が回答した点である。その理由として、「今まで聞かれたことが無かったから」「被災する前には私は普通の人間で、他人に話すほどの内容ではないと思ったから」といった理由が多く寄せられた。

数十年間、一度も「Days - Before」の語りが聞き取られることが無かったという被災者の声は、「Days - Before」の語りが「死角」になっていたことの証左と言える。災害からの復興や被災者の回復を考える時、

被災地に暮らす住民を被災者として捉える前に、被災前から続くライフ・ヒストリーを持つ一人の人間として見つめるために、「Days・Before」の語りの視点に注目することが今後重要である。

## （２）被害の大小に拘泥せず表現される語り

本研究の調査対象とした新潟県中越地震と昭和南海地震で被災した住民の中では、震災によって親類縁者を喪失した住民ではなく、家屋の一部倒壊や軽微な被害に留まる住民が大勢を占めていた。そのため、彼らは自分自身の直接的な経験として劇的な被災をしたとは語りえない住民である。こうした住民の中には、自らの被害の程度の小ささを他者と比較しつつ、自身が被災体験を語るほどの大きな経験はしていないという理由で、自らの被災経験談を話すことを躊躇する人もいる。特に、昭和南海地震の場合は、歴代の南海地震と比しても小さな規模の災害であったことから、直接的な災害の被害を受けた住民は少ない。そのため、先述の理由で自身の被災経験談を語ることに、抵抗を示す住民が多い。本研究においても、「私は話すほどの経験はしていないから」という理由で被災経験談を話すことを躊躇う住民は現に存在した。しかし、冒頭で説明した本研究の趣旨を説明することによって、経験談を話すことを躊躇した住民の多くから、語りを聞き取ることができた。

本研究で用いた「Days・Before」の視点は、災害そのものにあえて中心的な視線を送らない立場である。これによって、災害による被害の規模の大小に見られる違いではなく、むしろ、住民が等しく享受していた被災前の穏やかな日常生活に光が当てられる。この結果として、今回、多くの被災者が、自らの被害の大小にそれほど拘泥することなく、経験談を話すことができたと推察できる。この意味でも、より多くの住民の語りを促す糸口としての特質を、「Days・Before」の語りは内包すると考える。

## （３）住民の経験談に対する新たな視座

いずれの被災地においても、「Days・Before」の語りから導出される、「災害が起きた現実世界」と「災

害が起こらなかったならばありえた想像世界」という二重の「語りの世界像」が導出された点が重要である。通常の被災経験談で語られるのは、前者の「災害が起きた現実世界」の「語りの世界像」のみである。一方で「Days・Before」の語りでは、災害という事実をあえて契機としない被災前の生活の語りから、災害を前提としない震災後の世界、すなわち「災害が起こらなかったならばありえた想像世界」という「語りの世界像」をも導出する。このような二重の「語りの世界像」の構造が、それぞれの住民の語りに新たな視座を構築している。

阪神・淡路大震災の被災者に対する聞き取り調査の場合、「災害が起こらなかったならばありえた想像世界」という新たな「語りの世界像」が加わったことが、震災で亡くなった親族の多様な性格や新たな一面を再発見する契機となっていた。そして、それが被災者の現在にも前向きの影響をもたらしていた。

新潟県中越地震の被災者に対する聞き取りでは、「災害が起きた現実世界」において被災後に多くの外部支援者が集落に入り、彼らと被災地の住民との交流の中で集落の魅力が再発見されていた。これに対し、「Days・Before」の語りは「災害が起こらなかったならばありえた想像世界」として、被災前から地域が持つ過疎化・限界集落といった問題を顕在化させ、二重の「語りの世界像」を比較対照することで、被災後の現実世界の「ありがたさ」を再発見するという効果をもたらした。

昭和南海地震の住民に対する聞き取り調査の場合、昭和南海地震が仮に無かったとしても、「災害が起きた現実世界」とはそれほど大きく変わらなかったことが、「Days・Before」の語りを通して、被災者に意識化された。そして、それが被災者の「今」を見つめる視点に影響していることが示唆された。

以上のように、「Days・Before」の視座を通して、「災害が起きた現実世界」と「災害が起こらなかったならばありえた想像世界」という二重の「語りの世界像」を得ることは、被災者に「今」を見つめる新たな



視座を構築させるのである。「Days - Before」の語りは、震災で亡くした親族、居住地域が抱える問題、時代特有の背景といった被災者の生活の歴史性を、被災の前後に分断することなく見つめていくための方策の一つであり、住民の生活復興、被災地の復旧・復興に対する新たな視点を提供するための糸口となると考える。

## 5. 課題

本稿の最後に、今後の課題を2点述べる。

1点目は、「Days - Before」の語りによるネガティブな効果である。幸いなことに、本研究で対象とした被災地の住民からは、本調査によるネガティブな反応や影響はあまりみられなかった。しかし、「Days - Before」の視座により語られた「災害が起ころなかったならばありえた想像世界」に対して、住民が拒絶の反応や過剰な没入を示してしまう危険性は考えられる。今後、「Days - Before」の語りの研究を進めていく上で、このようなリスクに十分配慮しつつ調査する必要がある。

2点目は、新たな研究対象への継続的な調査である。本研究では、3つの被災地を対象に研究を行い、それぞれの住民の語りの特徴をまとめた。上述の通り、被災地ごとに語りの内容は大きく異なり、今後「Days - Before」の語りについて、より詳細に検討するためには、性質を異にする新たな研究対象を含めて継続的な調査が必要であると考えられる。

## 謝辞

本研究にご協力くださった住民の皆様に感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 成田龍一 (1996) 関東大震災のメタヒストリーのために. 思想, 866号, 61-90
- 2) 高森順子・諏訪晃一 (2014) 災害体験の手記集の成立過程に関する一考察. 実験社会心理学研究, Vol.54(1), 25-39
- 3) 矢守克也・杉山高志 (2015) 「Days - Before」の語りに関する理論的考察. 質的心理学研究, 第14号, 110-127
- 4) 内閣府 (2014) 一日前プロジェクト  
<http://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/>  
(2015-3-25)